

GF

ジェンダーフォーラム
通信

GENDER FORUM PRESS

女とは? 男とは? 考えるマガジン

和光大学 ジェンダーフォーラム 〒195-8585 東京都町田市金井町2160 和光大学ジェンダーフリースペース(G112) TEL 044-989-7777 内線4112

HOT TOPICS

新創刊のことば

ジェンダーフォーラム 担当者より

井上輝子 [現代人間学部]

今年度から和光大学では、ジェンダーフォーラムを設置しました。2001年以来続けられてきたジェンダーフリースペースの活動を引き継ぎ、ジェンダーに関する国内外の情報・資料の提供、交流のための、大学の正規機関として再発足しました。この通信も、今までのジェンダーフリー通信を引き継ぎつつ、大幅に模様替えて、再スタートです。

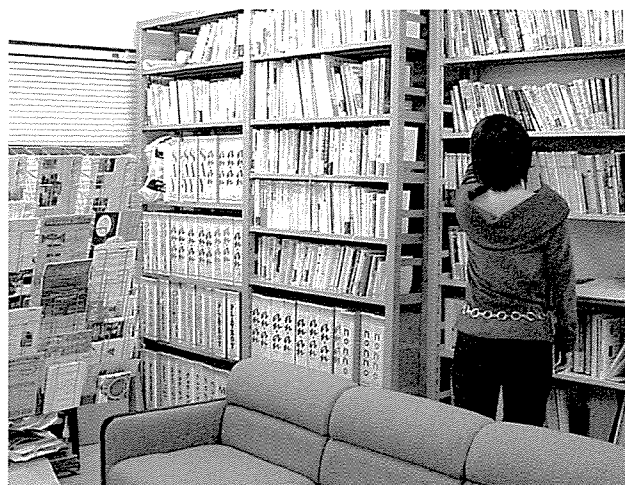
ジェンダーとは、社会的・文化的に構築された性別・性差を指す用語です。1975年の国際女性年に始まる世界的な動きのなかで、女性差別撤廃条約が結ばれ、日本でも男女平等社会の実現に向けて様々な法の制定・改正がなされています。ジェンダーに規定された社会は、女性を差別するだけでなく、同性愛者等の性的マイノリティを差別する異性愛社会であることなども明らかにされてきています。ジェンダー問題の解決は、21世紀に最重要な政策課題として、学校・職場・地域等あらゆる場で取り組みが期待されています。

和光大学ジェンダーフォーラムは、ジェンダーに関する研究と活動をつなげ、大学の構成員とりわけ学生の皆さんが、ジェンダー問題への認識を深め、ジェンダー問題に対処できる力の獲得に寄与するために、ジェンダーフリースペースを活動の場として、さまざまな事業を展開します。

遠方の方々や卒業生の皆さんにも、私たちの活動を知っていただきたく、GF通信を発刊するしだいです。ジェンダーフリースペースとGF通信を舞台として、ジェンダーをめぐる情報交流と意見討論が活性化することを期待します。

長尾洋子 [表現学部]

この数年、かつてウーマンリブ運動にたずさわった人々の「今」を訪ねる機会がありました。自分の経験や考え、感情を自由にあらわす言葉も場所も限られていた時代に、心も体もはだかでおしゃべりできる相手を求めて発信し、ネットワークをつくっていった女たちが多くに勇気を得ました。今回ジェンダーフォーラムに担当者として参加することで、ひとりでも多くの方に私が感じた勇気を手渡すことが出来ればと



思っています。

ジェンダーフォーラムは大学に拠点をおいていることに特徴があります。まずはキャンパス・ライフでジェンダーの規範がどんなふうにはたっているか、みなさんのアンテナが立ってくるような企画を提供していきたいです。といってもこういうイベントはキャンパス・ライフの主人公たち自身が運営に関わってはじめて実りをもたらすもの。いずれはみんな入り乱れてワイワイガヤガヤ、ジェンダーにまつわる「生きにくさ」がなくなるような活動を自然体でやっていければ最高です。

杉本昌昭 [経済経営学部]

ジェンダーフォーラム (GF) に学生の皆さんはどのようにかわっていったらよいのでしょうか。

GF では、ジェンダー・フリーを目指して活動することができますが、やりたいことが明確な学生だけの組織ではありません。自分のジェンダーに違和感を覚える人、女/男であるがゆえに社会から求められることや、みずからかくあるべしと思う内容を受容できないひと——とりあえずはジェンダーフリースペース (GFS) に足を運んでみてください。GF は組織の名称であり、その活動の場=物理的な空間がGFS です。座る場所があり、読む本があって、話し相手が見つかります。レポートの資料をあさることもできます。学生が企画した自主イベントも行われていますから、興味が沸いたらお手伝いをしてください。GFS におのずから集い、GF の活動に自然とかかわっていく、そんな参加の道筋を私たちは考えています。

花も嵐も講釈師が語ります

講釈師、神田香織さんとその半生

EVENT REPORT

— 神田香織さんをお招きして、昨年2006年11月15日和光大学Jホールにて熱く語って頂きました。神田さんは講釈師として二人の娘の母親として、その人生はまさに花も嵐も乗り越えて、人生に希望と勇気を持ってパワフルに活躍されています。今回のタイトルは、2005年に出版された神田さんのエッセー（七つ森書館）から頂いたものです。

講談師になったきっかけ

私は福島県いわき市出身で、威勢のいい尻上がりになっていくというイントネーションの特徴がございませう。将来は舞台の俳優さんになりたいと思って高校卒業と同時に劇団に入っただけなんですけれども、このいわき弁がなかなか標準語に直らず訛っているとと言われてしまう。辞めるしかないかと思っていたときに、声を大きくしたり、活舌を良くしたり、表現や演舞の勉強になるのは、劇団の養成所なんかよりも講談の方がいいんだよ、と薦められて連れて行かれたところが、二代目の神田山陽。「男社会の講談の世界に女性のプロを育てたい。プロにならなくても講談の良さを身に付けて女優として成功してもらいたい」という願いを込めて一生懸命教えてくれていたんですね。思い切って一年間講談のお稽古に通いました。で、この世界に入ろうと心を決めたわけがございませう。芸は身を助くというから、もしかしたら将来私のことを助けてくれるかもしれないな。それから一つのお話（ネタ）を覚えると財産になる、きっとこれは将来役に立つに違いないと思ったんですね。

『はだしのゲン』と結婚生活

代表作誕生

3年間の下積みの前座修行というのがあり、芸の心構えを学んだ後、やっと二つ目という身分になりましてプロとしてスタートするわけです。二つ目に昇進した時、私はサイパンに遊びに行っただけです。ここで戦跡、万歳クリフという所に行きまして、非常に申し訳ないような気持ちになりました。で、戦争のことを語ってみようと思ったわけです。日本に戻りまして、勉強して歩きました。その時『はだしのゲン』という中沢啓治さんが自らの被爆体験を書いた漫画の単行本全10巻を見つけたわけです。

『はだしのゲン』だったら戦争と原爆の悲惨なことを力強くパワ



フルに伝えることが出来るに違いない。そう思って講談にしだしたのが1986年だったんです。まさにこのときに私は結婚をしたわけなんです。彼も一生懸命協力してくれて1986年8月に『講談はだしのゲン』が出来上がり、これを発表して日本雑学大賞というのを頂くことになるんです。



家庭生活

結婚生活10年やっておりまして、最初の5年間は天国、後の5年間はその対極の地獄でございませう。最初の5年間は協力してくれた、しかし彼の仕事は変わりました。大きな病院の経営をいきなり任されることになったんですね。アメリカに行って日本に戻って来たら、考え方が全然違っておりまして。それまで講談という仕事であれ、女房が仕事をやるのは応援すると言っていたのが、病院の経営者になった自分に芸人の妻がいるというのは世間的にみつともない、辞めろという風になったんですね。そして講談をやる環境を段々なくしていくわけですね。自分の自由がなくなってしまう。そして子育ては女が一人で出来ると決まっていると、言い出しましてね。一切、自分は手伝わない。そしてお前は一人じゃ何も出来ない、バカなんだ、ということは何かに付けて言われますと、追い詰めていって自分に自信がなくなるわけですね。ついに体にまで変調をきたすようになって、とうとう置手紙をして実家に戻って以来、その家には戻らなかつたわけですね。今色々なはじめが話題になっております。逃げる場所というのがやはりとても必要。逃げる勇気と逃げるということが本当に大切だなと思うんですね。とにかく安全な場所で自分の身の振り方を考える。そういうことが必要ではないかな

学生感想より [一部抜粋]

- ◎神田さんの言葉一つ一つがとてもしっかり、「生きる」ということがとても大切なんだということ改めて深く心に刻むことが出来ました。(経済学科3年)
- ◎すごく話し方が上手で、ドンドン話の中に入っていきいってしまふという間な講演でした。大変な経験をしてきているのに、すごくパワフルで明るくて、神田さんのかっこよさが印象に残りました。「こんな私でもその時は心が病んだ」ということ、精神的ドメスティックバイオレンスの怖さを感じました。(人間関係学科3年)
- ◎『はだしのゲン』は漫画で読んだことはあったが、初めて講談で聞いて漫画より戦争の残酷さがよりリアルに心に響いた。胸が痛かった。(人間発達学科3年)
- ◎自分の辛い話をまっすぐに話せることは尊敬する。たくさんの苦勞や苦難を乗り越えた強さ、そしてその判断を出来る勇気は見習いたいことでした。女性だから男性だからではなく、一人の人として強い気持ちを持っている人だと感じました。(人間発達学科3年)

と昨今思うわけですね。

続く裁判

その後7年間に渡ってずっと裁判を受けているんですね。最初は離婚調停で、3年後に親権をめぐる調停をしました。結局高等裁判所で私に親権を渡すということになりまして、その後やはり面白くないのでしょう。自分がシナリオを作るのに協力したんだから、『はだしのゲンは』語ってはいけないという裁判を起こすようになるわけなんです。結果的には私がやってもいいということで、もちろん今でも代表作としてやらせて頂いているわけでごじます。

男女の差を越えて人間として当たり前前に自信を持って生きていくということが面白くない、つぶそうとする人がいる。そういうものを無くして本当にジェンダーフリーということで、それぞれがそれぞれらしい人生を送れるようにしなければいけないと私は思うんです。

——講談に興味を持ってもらいたいと、本来はホールで音響や照明を用いて演じる立体講談『はだしのゲン』の冒頭を語ってくれました。語りのみにもかかわらず、メリハリの聞いた声で語られる講談(被爆のシーン)は、すごい迫力で会場中が聞き入ってしまいました。講談のこと、結婚のこと、原発や戦争のこと。時には笑いを交えながら、色々語ってくれました。生で講談を聞き、迫力ある話芸には引き込まれてしまいました。それと同時に、プロの噺家として、女性として、人間としてその力強い生き方に刺激を受けました。

○当日の講演を取めたビデオテープもジェンダーフリースペースにあります。実際の神田さんの語りは一見の価値アリです。興味のある人は是非、ご覧になってください。
○神田香織さん公認ホームページ <http://www.ppn.co.jp/kannda/main.html>

ESSAY

「産む機械」発言をめぐる

「女性は産む機械、装置」に譬えた柳沢厚労相の発言。これは「産む機械」として人権侵害だけではなく、女性が不妊や出産などの生殖を含め女性のからだについて、生涯にわたって、いかに悩み、苦しむかについて無理解な日本の男性の意識を象徴している。また「産めよ、殖やせよ」の戦前の人口政策同様、統計の対象として女性の身体をみていることも否定できない。政治家による女性差別に対する無自覚、人権感覚の欠如はそれほどの驚きではない。面白いと思ったのは、地方都市で大臣の発言に疑問と怒りを感じた若い女性記者による記事がインターネット上で広がり、マスメディアにも取り上げられ、政治課題として国会審議にまで影響を及ぼしたことだ。発言後、直ちに、女性団体は発言撤回、辞任要求、意見書などを厚労省に提出し、国会前や有楽町マリオン前で街頭行動を行い、なにに怒っているかを訴え、緊急集会では意見交換を行った。ところが街頭行動ではマイクを握って熱い思いを語ったのは残念ながら生殖年齢が過ぎた女性が大半。当事者の声がほとんど無かった。しかし若い世代は無関心なのではないと緊急集会に参加した20代の女性の意見に私は正直安堵した。ウェブサイト上で、自分たちの世代の多くが「柳沢発言」に関する意見を日記に書き込み少子化の責任を女性に

転嫁する発想、産みたくても産めない現状、「健全な」家族観や生き方まで介入する政治に批判的だということだ。政治の世界の男尊女卑に怒りつつも、このような若い世代が多様化している現状を目にして、また情報が瞬間的に世界に発信されるICTの時代。若い世代は権力者が考えているほど容易に生殖を含め、生き方の統制を黙認しないのでは、と柳沢発言を契機に改めてオプティミスティックな希望を抱いている。

(船橋邦子/本学非常勤講師)

WORKSHOP

コミュニケーション力を高めよう

未来を描くワークショップ

——2006年10月13日に産業カウンセラーであり、和光大学の卒業生でもある疋田奈緒美さんに来て頂きワークショップを開催しました。ほとんどの学生が直面する進路(就職活動)だけでなく、その後のライフプランや生き方といった広い視野で自分自身を見つめ、考えるきっかけになれば…との企画でした。自己と他者による分析を通して等身大の今の自分を知ること、その延長線上に自分の未来(将来像)をイメージすることができたのではないのでしょうか。

先日、コミュニケーション力を高めるワークショップに参加した。どんな事をやるのか興味があったのと、就職活動を目前に控えていたので役に立つのではないかと思ったからだ。参加者は6人と少人数だったが、むしろ発言しやすく楽しかった。内容は二人一組になり、相手の一番して欲しいことを聞いて他己紹介したり、将来の自分が何をしているかを想像して紙に書き出してみたりした。中でも面白かったのが愛情、自然、地域、安定等の26個のキーワードから大切にしたいものを選ぶ作業だった。26個の中から5つを選択する作業は難しく、自分の中で何が大切か明確になった。その上でなぜ自分がそれを選んだのか理由を付けて発表しあった。自分の一番譲れないものが明確になると同時に、他の参加者の意見を聞いて価値観の違いが分かった。自分が大切にしたいことは、向上心、趣味、健康、生涯学習、心の豊かさであった。この事から成長していける環境を望んでいることに私自身気付く事ができた。就職活動をする上で軸になるものが見えてきたので、参加できてよかった。

(経営メディア学科4年/河合美幸)

学生の持ち込み企画募集

ジェンダーに関する企画の持ち込みを歓迎します。ビデオの上映会をするもよし、読書会や、お話を聞いてみたい人を和光大学に呼ぶもよし。自分の面白いと思うイベントを自分で開催してみませんか。ジェンダーフォーラムはそんな学生の応援・サポートをします。一人でも、グループでもかまいませんので、いつでも気軽に相談に来てください。また、ジェンダーフォーラム自体の活動に興味のある学生も募集中です。

坂本文庫

坂本喜久子さんより寄贈された約200冊の文献

まるでジェンダーフォーラム開設を予期していたかのように嬉しい話が舞いこんできた。200冊ちかくもの女性史を中心とした文献を譲ってくださるという坂本喜久子さんからの申し出である。そもそもは地域の女性たちと40年ほど続けた毎月一回の読書会のために購入したものだそうだが、書庫にも入りきらないとのこと。目的を持って買い揃えた蔵書でもあり古書店を介して見ず知らずの人の手に渡るのを忍びないので、できればまとめて活用してくれるようなひきとり手を探しておられたという。

坂本さんは1950年代にアメリカで国際関係論を学びリサーチ・アシスタントとして勤務をなさった後、帰国。新居をかまえた練馬区石神井町で、近所に住む家々を回り「誰に投票するかは自由です。でも、誰に投票するかをきちんと考えられるよう、一緒に勉強をしませんか。」と女性たちに声をかけた。60年安保にゆれていた当時、こうして20人ちかくが集まった。大半は家庭の主婦。子供たちの姿もある。最初は肩肘はず、本そのものに親しんでもらおうという意図もあって子どもの本からはじめたようだ。

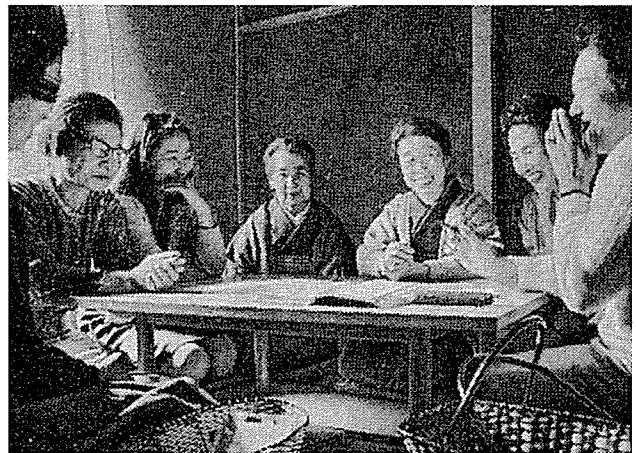
いちばん初めに読んだのは『にあんちゃん』（安本末子著）。昭和20年代に佐賀県の杵島炭鉱に生きた10歳の少女が綴った日記である。この炭鉱は多くの中国人、朝鮮人が強制労働させられた歴史を持っている。だから「にあんちゃん」を読むことは、東アジアの近現代史と現在を改めて問い直してみることにもつながる。当時をふりかえって、さりげなく「おかあさんの人も多いでしょ、だから子どもの本から始めたんです。」とおっしゃる坂本さんの、じつは巧みで鋭い選書が読書会の質を支えていたのではないかな。

この読書会のメンバーで、ソ連の核実験反対を訴えてソビエ

ト大使館にも子どもたちをつれてデモに赴いたこともあったという。許可をとっていなかったので門の前でうろろしていたら、子どもがいたのがめずらしかったせいか、逆に招きいれられたという。大人たちが核実験反対のメッセージを伝えるべく大使館員と話をしている間中、子どもたちは大きなソファの上をびよんびよん跳ねて遊んでいたとか。帰り際には「楽しかったね。また来ようね。」と満面の笑顔。集うこと、読書すること、語り合うこと、子どもを育てること、平和活動を行うこと…これらがすべて渾然一体となっていた様子がうかがえる。

子どもの本から出発したこの読書会は毎月一冊ずつ新しい本を手に入れて回覧し話し合いを持つという活動を続け、他のジャンルの本にも関心をうつしていった。その後メンバーから系統的に読んでみたいという声が出てきたのをきっかけに、女性史の本にとりくみはじめたようだ。その大半をジェンダーフォーラムはゆずりうける運びとなったが、中には現在では手に入りにくい、地方の女性史、聞き書き等も含まれている。提供者の坂本さんに感謝の意をこめて「坂本文庫」とした。ぜひ手にとってほしい。

(長尾洋子/表現学部講師)



読書会の様子

EVENT SCHEDULE

春からのイベントスケジュール

この他にも色々計画中です。詳細は掲示やHPをご覧ください。

展示・ビデオ上映・トークセッション

◎「松井やよりの全仕事」展

日時……………6月18日(月)―23日(土)

場所……………和光大学図書館梅根記念室

関連企画……………ビデオ上映

「松井やより 全力疾走―ガンと闘った2ヵ月半の記録」

トークセッション「船橋邦子&井上輝子」ほか

松井やより(1934年～2002年)さんは日本を代表するジャーナリストの一人でした。公害、食品汚染、貧困、買春観光、開発援助と環境開発、日本の戦争責任、「慰安婦」など、鋭い切り口の記事で世論を喚起しました。また、市民活動にも積極的に参加し、2000年には女性国際戦犯法廷を提案し実現させました。

講演会

◎国民国家形成と「母性」イメージ

狩野芳崖《悲母観音》を読む

日時……………7月4日(水)

場所……………未定

関連企画……………千葉慶(『女と男の表現空間』担当)

◎ジェンダー・カフェ開催中

日時……………火―金曜のお昼休み(12:10―13:00)

場所……………ジェンダーフリースペース(G112)

ジェンダーについて感じていること思っていることを、お昼を食べながら教員・学生交えて自由におしゃべりしています。いつでも自由参加なので、気軽に覗いてみてください。